



③ 中世のケド (道路) 子母沢の奥

きた。

それでは中世のケド、ヤジャのケドから一足飛びに山根道が出現したのだろうか。飯詰の高樞城主、朝日弾正が攻略されたのは天正十六年(一五八八)だから、高樞城落城とともに急激に廃れ、十年もたたずに下岩崎から、中柏木に通じる小路がで

跡は探し出すことができる。嘉瀬スキー場の中柏木寄りのところと、スキー場の下の喜良市寄りの場所、そして今は小田川城といわれる西側と、私が知っている場所だけでも三ヶ所で、往時の道の姿を確認できる。この道も、下ノ切道の延長線にあたるが、一名山根道ともいわれて

き上がったであろう。

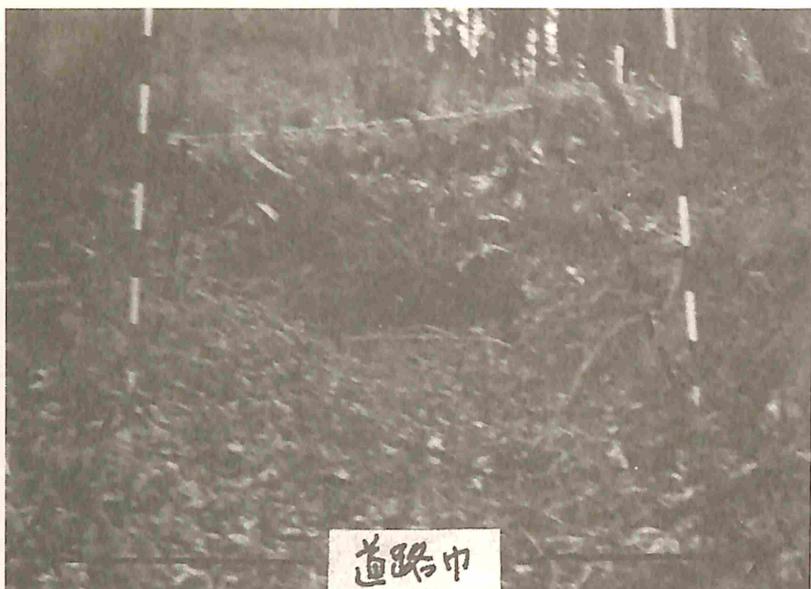
その小路跡は昭和四十年頃までは散見されたが、今は跡形もなく開発されてしまったが、その道跡はヤジャのケドよりも幅が狭いような気がした。ヤジャのケドは何百年と長きにわたって利用されたのたいして、下岩崎、中柏木間の小路は百年そこそこであるがためによるものであると思う。

④ 中世のケド (道路) 中ノ沢の奥



中世におけるヤジャのケドの役割が終わったのは天正時代、その後元禄時代の二間道路が供用されるまでの百年の間、飯詰、下岩崎、中柏木、嘉瀬、小田川、喜良市への行程は、中柏木の

村を過ぎて一ノ沢の山を東に斜めに登り現在の農協の育苗センターの上あたりを出口として、嘉瀬へは緩やかな下り坂、小田川へは、嘉瀬と、小田川の分岐点まで登り小田川へと下って行くのである。従って中柏木から嘉瀬までは、目で見える村でありながら一里十五丁(五六六九米)と距離が長くなるのである。元禄の二間道路ができてからでも、中柏木から嘉瀬に行くには、嘉瀬スキー場の所まで行き着き、それから嘉瀬村に辿り着くのだが、荷物を運ぶには相当難易な道筋であったろう。その後いつ頃の時代かは文献がないのではつきりしないが、



⑤ 中世のケド (道路) 中沢の奥

嘉瀬への道は中柏木の原野の端から、嘉瀬の原野の端、現在の津軽鉄道線あたりを、大正の終りまで人道として使用したといわれている。

⑥ 平成十四年に完成された車道。ほとんど明治・大正に開削された道筋を利用して拡幅された砂利道の林道





⑦ウドの沢の交点でヤジヤのケドと
交わりあった所で出土した

のに尺貫法で計ったろうが、面白いのは、普通は六尺をもつて一間とするが、六尺三寸をもつて一間とする測り方もあるのだ。私達が小さい頃はほとんど茅葺きの家であり苦屋であった。たまたまその中に六尺三寸を一間とする建物があった。柱と柱の間が六尺三寸で、それを間延びといった。当時の大人の人に聞いて

時に測量した三十六丁が一里でなく、四十八丁を一里として計算した可能性はある。メートル法では一〇、九〇〇メートル余で、今実際に計測してみたら一〇、四〇〇メートルで、やや近似値を示しているのだ。

距離を計る

でも明確な答えは得られなかったが、なかには不利な生活を強いられた農民のささやかな抵抗であり、また一間に六尺の物を入れ込むときに非常に便利であったからだという。古老の話によれば大正の代まで六尺三寸を一間とする間紐けんひもがあったというが、この紐を一番利用したのは田の測量だという。小作にしても、自作にしても、江戸時代の年貢であり、小作料であり、税である。同じ一反歩を小作するとしても延びとび（下が大きい）がある一反歩と、かっさりの一反歩ではかなりの差が生ずるのである。場合によつては一、五倍の



⑧明治・大正に開削された道
一の沢の奥

中道



⑨嘉瀬村と小田川村との分岐点、左側は
小田川への道、手前の下り道は嘉瀬への
道、右は中世の道

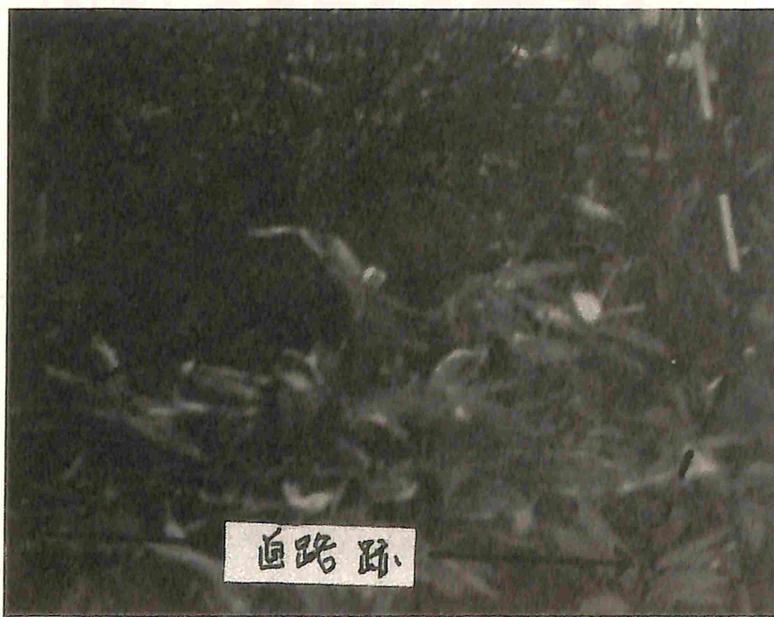
ろから記してみると、下岩崎村北端より一里塚まで二百三十間（四一八米）、下岩崎と中柏木間に十丁杭より五十六間（一〇二米）、中柏木村内百二十八間二三三米）、中柏木北端の一里塚より村境まで四百間（七二八米）、中柏木と小田川の中間に十丁杭一ヶ所（一〇八〇米）、小田川村内百七十四間（三一六米）、

延びのある水田もあったのだ。だから金木地方の年貢（分米）六公四民でも生き延びることができたのである。

話は前に戻るが、元禄時代に造成された二間道路の距離の結果は次のようになっている。中柏木に
関係あるとこ

小田川村境より北方二十三間に十丁杭、喜良市村内二百十六間（三九三米）、と金木、不動林、また川倉、深江田、中里とまだまだ下ノ切道路は続いて行くのである。ここでちよつと不思議なのは下岩崎はあるが、上岩崎はない。下があれば上もあつて然るべきなのに、それが無いのだ。下岩崎の年輩の人に訊ねても、ここから上上り（かみのほり）しても上岩崎という村はなく、聞いたことが無いという。津軽藩において藩全体からみれば西に

⑩中世の道が廃れたあとの中柏木村
から小田川村への出口道（笹ヤブの
下にケド跡がある）
農協の育苗センターの北の上



道跡

も岩崎村があり、上(南)に位置しているので、そのまま岩崎村になり、下岩崎はもと単に岩崎村であったが、西の岩崎に對して北(下)だから下岩崎という集落の名を冠したのかもしれない。何十里と離れていても、藩内に同一の名の集落があつてはならないのだ。

それで元禄時代に造成された山根道を、自動車のメーターを使つて私なりに何回も計測してみたら、驚くほどにその誤差はない。

飯詰と下岩崎の境界点を捉え、下岩崎の北端、つまり村はずれの場所は、味噌ヶ沢から集団で移転して来た場所の共同墓地あたりで、それから一里塚を経て、中柏木迄の十丁杭三ヶ所の下の杭は、中柏木集落の七面様の入口前あたりで、そこから一〇二米の場所が往時の村の入口にあたるのである。はつきり言えば故人で元金木町の助役を努めた成田勇蔵氏宅の入口付近で、それから村内二三三米は村社である磯崎神社の入口である。その後明治十年になつても成田氏宅前には家がなかつたといふことだが、領かれるのである。そこで当時、村内は成田氏宅前から、神社前までとして、その距離のなかにどれだけの人が住み、どれだけ家数があつたか考えてみた。道路完成の時点ではないが、それから三十四年後の享保十三年の検地には、家数十六軒、人数八十六人、馬数二十二疋とでているから、三十四年間とは、人生五十年といわれた時代のことであれば一世代前で、道路完成時には、すべて少し少なかったと思われる。そ

うい負荷が大きく作用しているためであろう。いまこうして昔のケドの利用価値を評価してみれば、ヤジャのケド時代には中柏木も嘉瀬も、隠れ村の様相を呈し、ヤジャのケドの本通りから中柏木村迄一・八キロ、嘉瀬村へは小田川村への分岐点から二・四キロと入り込まないと村へは到達しないのは、離れ村と同時に隠れ里であつたという意味も含まれている。小田川、喜良市、金木の各村は本通りに面していたので、生活文化の吸収も早かつたろう。元禄時代の二間道路ができて、嘉瀬へはスキー場から派立町内の保食(うけもち)宮まで〇・九キロ、本町の中心までは一・五キロと歩かねばならなかつた。

人が住んだから道ができたのか、それとも道ができたから人が住んだのかの二つに一つの選び方は適当でないと思うが、少なくとも昔においては、人が住んだから道が開けた確率が高いような気がする。道によって文化が開け、人々の生活が豊かになつていくことは、間違いないが道によってそこに住む人達の匂いが違つて見えることもある。風俗、生産物の種類によって必然的に形が現れるからである。

戦前においてはとくに嘉瀬の人達の言葉遣いが良くなかつた。古郷のことを殊更卑下したくはないが、中柏木もことばにおいて嘉瀬と同類であつた。その昔隠れ里の生活の影響の影が昭和も二桁まで連綿と続いていたのではないだろうか。

中柏木は古い村であると言われているが、その証は皆無に等

れにしても一世帯あたりの家族数があまりにも少ない。一世帯で五・三七五人で、平均して大人半分としても、子供の数が極端に低いではないだろうか。江戸時代には人口が殖えなかつたのは事実だが、中柏木及び近辺の村々でも幼児の死亡率が高かつたのだろうか。

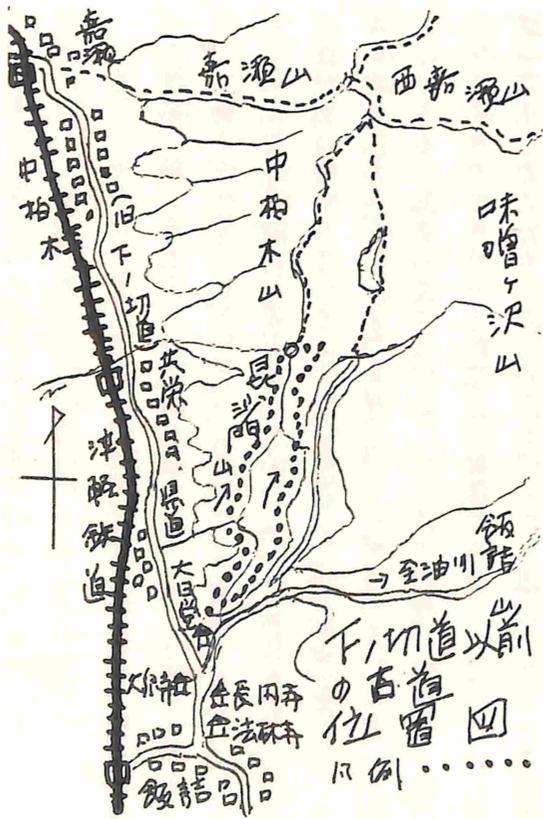
江戸時代の始め、家康の農政の手引きは、田畑一町歩を男三人女一人馬一匹でもつて耕作しとあるが、これは関東関西あたりのことで、津軽では大人一人当たり五反歩の耕作が可能であつたといわれている。それにしても戸数の割りには馬の頭数が多い。馬の労役は一戸で一頭あればまに合うものだが、労役ばかりでなく、原野が多く稜が豊富だから子馬の販売を目的として飼育していたかもしれない。

享保の検地で中柏木の耕作面積が三〇町九反余とは、十六戸で耕作していれば、一戸当たり一町九反余で、一世帯子供も含めて五・四人で耕作したとは、労働力の凄さに驚かされる。

この検地で中柏木以外の近村の耕作は、嘉瀬村で一戸当たりの耕作は田畑合わせて、一町二反五畝、一戸当たり平均人数は五・七七人、一戸あたりの馬の数は〇・七四疋で、中柏木よりかなり落ち込んでいる。小田川村では一戸あたりの耕作反別は二町一反五畝で、馬の数は二疋、人の数は七・〇三人で、反別、馬、人数とも他を圧している。喜良市村では耕作反別七反五畝、馬一・五疋、人数六・三七人で、小田川、喜良市とも一戸当たりの馬の飼育が多いのは、単に農耕馬ばかりではなく、山仕事と

しい。どうしてならそれは道にあるのだ。元禄の二間道路ができて始めて歴史の脚光をあびることになるのだが、それ以前にも中柏木村として人が住んでいたのだが、数戸の集団で形作っていたのだろうか。中柏木の古い家の系統でも、当代で七代とか八代といわれているが、八代としても実質一代を平均二十五年とすれば寛政(一七八九年)あたりで酷な話ですが天明三年の大飢饉で死に絶えるか、秋田方面に離散して廃村になつた可能性が強いのである。

いま残されている古い石碑で天保(一八三〇年)の年号だから廃村の見方は当たらずとも遠からずで、天明の大凶作から九十四年後の明治十年で一〇戸を成していたから確実しても差し支えないと思う。



ガンドが跳梁した中世のヤジャのケドから近村に通じる道筋について分かったことは、私にとつても大きな収穫であったしヤジャのケドも終りの分岐点から小田川村まで三・七キロ、嘉瀬村まで二・四キロ、中柏木村まで二キロと距離もわかったことは中世の人達の貌が見えるようで歴史の残照として眺めてみれば楽しいことであった。

終りに中世のケド、ヤジャのケドのケドへの入口（飯詰の下の方の分岐点）は二つの道筋が考えられる。ひとつはそれは現在の飯詰の大日如来宮を始点として味噌ケ沢部落（昭和四十九年廃村）を経由して、毘沙門山の注ぎ口に到達してヤジャの山ケドに入るのであるが、もう一つの道筋は大日如来宮の裏手から、ゆるやかな山の稜線を登り、毘沙門山に至る道である。飯詰の高橋城落城（天正十六年、一五八八）以前迄は、味噌ケ沢部落經由は主流の道で、この部落で、水、軽い食料、履物等を補給して、中柏木村、嘉瀬村小田川村、金木村と辿り着くのである。

大日如来宮から味噌ケ沢部落への道はほぼ平坦な道で、如来宮から部落の北端まで三・二キロメートルで、ここから標高差四十八メートルの山を登って毘沙門山に至りヤジャのケドにはいるのである。

部落の北端から毘沙門山までは直線距離では二百八十米です

が、実際は勾配をゆるやかにして歩くため、曲がりくねった山ケドになって直線距離の倍位の道程になるのである。

味噌ケ沢部落は、現在の車ケドの感覚からみれば、行きづまりの部落、閉ざされた村、落人の隠れ里のような形にみられることもあるが、中世においては、りっぱな往還道であったのだ。もちろん現在は廃村になっているが、耕地は耕作されていて、生産活動は行われている。飯詰の北の社の大日如来宮から一・五キロで水田が現れ、二・八キロで当時の部落の入口に差しかかるのである。部落の長さは戸数（十二戸）の割りには長く四〇〇米もあったのだ。一方如来宮の裏手から登った道は、山の稜線を利用したのだが、だからと続いた坂道は、ヤジャの山ケドに入るには味噌ケ沢部落經由と距離は似たものだがなぜだか敬遠された道筋のようであった。

ちよつと脇道に逸れる話で恐縮ですが、今までに書いて来た飯詰の大日如来宮というお宮は、距離の起点としての計測に都合のよい場所であるから、私なりに利用していますが、神社としての名称としては違和感をかんだので、調べてみたら神仏混淆の時代の名残の一社であることが分かった。由緒に依れば宝暦十二年（一七六二）に勧請されたらしいが、当初は大日様と言つて仏教的な性格をもっていたらしいが、現在の祭神は天照大神で明治三年の廃仏毀釈のとき、よほどうまく言い逃れたものと思われる。神社でありながら管理は飯詰の浄土宗大泉寺の管轄にあるという。大日如来とは釈迦仏のことと思われるし、

而建立仕候、其後下派中二而修覆再立仕來候。

- 一、堂 社 板 葺 東西四尺 南北三尺五寸
- 一、兩 鞘 萱 葺 東西二間半 南北四間
- 右堂社並兩鞘迄下派中二而修覆再立仕來候
- 一、棟札三枚、宝暦十二年九月一枚、天明二年四月一枚

安政五年三月一枚

- 一、神 事 定例無御座候 十ヶ年二モ二十ヶ年二モ其時ノ相談ニ寄稀ニ御座候 夕宮計毎年六月七日講中二而執行仕來候。
- 一、境内林 東西二十九間 南北三十間 講中仕立
- 一、境内田畑 無御座候
- 右境内貞享御新檢御調後建立仕候ニ付御除ニ無御座候、社務之儀ハ鎧守別當ニ付 先祖四代目度便代ヨリ所持仕候、当時拙僧ニ而社務相勤罷在候間、御引入被下置奉願候。

△明治十三年各郡庵佛堂明細帳

大日堂 飯詰村字影日沢 大泉寺受持

- 一、本尊 金剛海、大日如来
- 一、由緒 宝暦十二年創立
- 一、建物 堅二間三尺 横四間
- 一、境内 六十坪 但民有地第一種、飯詰村新岡茂三郎私有地
- 一、信徒 二十人
- 一、青森縣廳迄距離九里二丁

また天照大神は、日本の神話時代に登場する名の神で八百万（やおよろず）の代表的な神の一人で、神も仏も一緒に名を連ねているのは日本全国でも珍しいお宮で、建前と本音、そして生き残りをかけた神仏混淆の印を見るようで実に面白い。ついでながら廢物毀積のときには他の宗派に比べて浄土宗は、一番指弾を受けたようである。

中世のケド、ヤジャの山ケドは、軍用道路というよりも、一般の人々の商道路であり、交際道路であつて、十三港の覇者安東氏族の治める前から、陸路の一つとして何百年も利用されて来た道である。

■大日堂参考資料文献（飯詰村史） 昭和二十六年九月十日発行、編輯人 福士貞蔵、発行人 飯詰村長 中谷弥八郎 第十章神社佛閣、第三節 大日堂より抜萃。

第三節 大日堂

一、祭 神 大日如来（天昭大神）

一、由 緒 宝暦十三年勧請

△安政四年諸神社明細並別當由緒書

大日堂社 別當 大光院持

右ハ宝暦十二年大日尊躰飯詰村大泉寺ニ被成大光臨候ニ付、右之段村方ニ咄合仕候處、撰社地ヲ堂一字源四郎ト申者取持仕候

堂宇建立の宝暦十二年時には天昭大神の神と、大日如来の件を合体した混合庵堂であった明治十三年の明細帳を見ると、金剛海大日如来本尊をまつる庵堂に倉替えしていることが裏付けられる。

なお、堂宇の所在位置が朝日沢山、味噌ヶ沢山に至る山道、中柏木山・毘沙門山に至る分岐点に位置、津軽藩の主要道下の切道が位置するところから山への入山者、下の切道の通行者の監視の番所を大日堂はかねて得たと伝えられてきた。

金木町支所前



飲み処 やわらぎ(和)

電話 54 - 1078

毎月第2火曜日は3時間で2,500円

飲み放題



「津軽弁 嘉瀬小話」

阿部按摩師笑い話こ

「世界が苦しい」

孫に嫁コ貰ってから、マヨ婆さんは、すっかり不眠症になった。

二階から孫夫婦の激しい朝夜の作業状況が、真下に寝ている婆さんに○秘ビデオのように聞こえてくるのだ。

ある日、婆さんは嫁のモモ子に尋ねた。

「モモ子さんや、テレビで、セックス・セックスって、シャベルドモなんのことダベ」

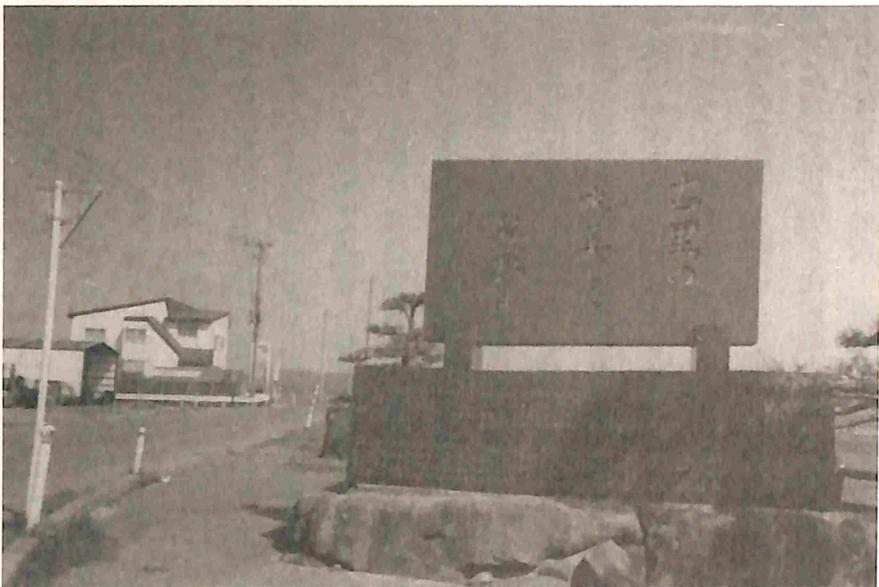
「セックス、テガー、世界中の人たちが苦労しているハンデ、それを略して『世ツ苦ス』って、シャベルンダネ」

「ハバー、イガッター(実はウガンダー)じ国は、みんな、朝・夜間いいことばれ、シテイルンダベナア」 (森村)

遺稿

小田川治水物語り

秋元 惣之進



今から約三二一年前(寛文一年〓西一六六一)、金木地区嘉瀬新田開発事業が、実に数十年と言う長い年月で継続され、延宝年間(約三二七年前)には嘉瀬の水田、約一七一町歩、開田成就なるも、打続く冷害や、喜良市山・嘉瀬山から流れくる小田川の水が、冷コ水から車町鍛冶町の大堰へと流れ、ひと雨

降る毎に大洪水になり、せつく植付けた稲は冠水し、又、日照りには大旱魃となり、農民は凶作不作のたびごとに甚大な被害を受け、泣くにも泣けず、離農する農家、食うに糧なく、草根木皮を以って、辛くも露命を凌ぐ有様で、飢饉の際には草根木皮すら尽きて、餓死者が出始めたが、それを見兼ねた時の金木代官は、大洪水の原因は小田川から、今の冷コ水〓車町〓鍛冶町へと流れる原始的、且蛇行的な大堰への流水とつきとめ、これには日夜頭を痛め、何とか小田川を岩木川近くまで川巾を広く、直線の小田川にと、四代藩主信政公に直言、藩では、藩直営工事として、本格的に河川掘削開発堤防工事計画を始めたが、今の津鉄の鉄橋付近から、旧十川下流迄の総延長三、七五〇米、堤防の上幅十七米、堤防高さ二米余り、下幅九米の測量計画案ができあがった。

当時の嘉瀬の家数六三軒(延宝年間〓三二七年前)、借家三軒、人数三九六人、馬二八頭、田一七一町五反九歩、畑三九町二反八歩(津軽知行之帳より)の小集落だった。

小田川の難工事を遂行するには、一日数十人、数百人と言う人夫が必要だったので、当然地域集落の人数だけでは人手不足で金木組代官では(金木組代官所は貞享四年〓西一六八七)二四ヶ村支配と津軽全域、又は羽後(秋田)、羽前(山形)、陸中(岩手)、越後(新潟)などからも大勢の人寄を募り、小田川工事に取組んだが、困難な事業だけに、心血を注いだ、ひと雨降